紫式部と藤原宣孝

上野辰義

紫式部と藤原宣孝の結婚生活の軌跡を、紫式部集の歌の理解に新見を加えつつ、追っていくと、結婚後まもなくから宣孝の夜離れが生じ、新妻紫式部は妻の一人として位置をどこに定めたらよいのか戸惑っている様子がうかがわれるが、夫に自己を開示できぬままに宣孝との齟齬は深まっていった。しかし、紫式部はそれに押しつぶされるわけではなく、夫の死を契機に自己とその境遇を客体視するようになり、生命的活力を源氏物語の執筆に繋げていった、と理解される。

はじめに
一、宣孝という男
二、「秋までは見じ」
三、「秋の気色に世はなりにけり」
四、宣孝の死
五、死を乗り越えて

はじめに

源氏物語作者としての紫式部にとって、夫となった藤原宣孝は彼女の心の中でどのような位置を占め、何を与え遺した男であったのか。このことは、中古の歌人・作家である紫式部個人の理解にとっても重要なことであるし、彼女の代表作源氏物語の創作の背景を知る上でも必要なことである。このことを、つまり、紫式部が宣孝をどのように見、彼とどのような共通の時間を過ごし、そしてそれが源氏物語の執筆とどう繋がっていったのかをうかがうには、とりあえず二人の交渉にまつわる歌を集めてある紫式部集をみるしかない。だが、紫式部集は、源氏物語作者の伝記資料として、他の私家集とくらべてこれまでにも比較的多くの注釈が積み重ねられているものの、紫式部と宣孝の折々の交流のさまを伝える歌は、少ないわけではないが、かといって必ずしも多いわけでなく、また和歌という短詩型の文芸によっているために、その器に盛られた抒情の中に封じ込められている詠者の意思をどのように定位したらよいのか、容易には見定めがたい事情もあって、個々の歌の理解には人によって少なからぬ振幅がみられる。紫式部集の歌を用いて式部と宣孝の交流の質と推移を見るには、いまだ十分な注意が要るのである。

それゆえ、本稿では、紫式部と藤原宣孝の交渉に関わる諸歌を、実践女子大本を底本とする新編国歌大観本紫式部集[1]によって、その解釈を含めて適宜検討してゆき、それをとおして、源氏物語作者となった紫式部にとっての夫藤原宣孝と過ごした時間の意味を追体験してみたいと思う。

一

紫式部と宣孝の接触の開始をうかがう資料としては、紫式部集4・5番歌（新編国歌大観本の歌番号、以下同じ）の方違えにまつわる朝顔の贈答をそれとする理解もあるが、相手の男を宣孝と特定する決め手はなく、断定はできない。しかし、長徳二年（九九六）越前守となった父為時とともに紫式部が京を離れる以前、十年もの間散位であった為時の邸に、方違えで訪れるような男はかなり身近な人物であったろうから、為時とは母方の従兄弟の息子という一族の男であり、花山朝に蔵人としてともに務め、具平親王を介しても結びついていた宣孝は、その当人として十分な可能性を持つ。この時の方違えで来訪した男が、女二人の寝室に侵入したらしく、式部が翌朝朝顔にまつわる歌の贈答を男と行ったという体験と歌は、後に源氏物語の帚木・空蟬・夕顔諸巻の構想や、空蟬・夕顔・朝顔宮・宇治の大君などの造形に大きな影響を与えている[2]ことをみても、この事

件が紫式部にとって重要なものであったことは確かだが、この男が可能性はあっても宣孝と断定はできない以上、この男が宣孝であった場合のこととして、いまは式部の意識をみておく。このとき、紫式部は翌朝自分から男に贈歌している。このことから、式部にしてみれば、宣孝は女からも歌を詠みかけられるような気楽な構えで行動することができる近親の男として既に存在していたこと、また、宣孝に関わりを持つことをも拒むような嫌悪の情を式部が抱いてはいなかったことが知られる。それ以後、二人が懸想文を交わすようになるところからすれば、この時の体験は、式部にとって宣孝に個別的な関心を抱いていく十分なきっかけになったと思われる。

宣孝は、長徳二年越前に下った紫式部のもとにも求婚の文を贈ってきて、その後も幾度となく手紙をよこすが、式部はそのたびに強い調子の拒否の歌（28〜31番歌）を返している。歌の調子は強いが、この時期の交流は、いまだ双方の出をうかがう小手調べの段階で、歌の交わし方もこの時期の常套的な範囲のものと見られる。それが、それらのどの歌が交わされた時期なのか、長徳三・四年ころ式部は父と別れて帰京し、宣孝が式部の京の邸宅を訪れて直接結婚を訴えるようになり、二人の間には次第に実際の結婚を意識するような親密さが形成されるに至ったようだ。次の贈答は、そのような段階のもの。

人の

83けぢかくて誰も心は見えにけむことは隔てぬ契りともがな

返し

84隔てじとならひしほどに夏衣薄き心をまづ知られぬる

以下、歌の贈答から浮かびあがる二人の交際の具体をみてみよう。83番歌の「けぢかくて」・「ことは」については以前に諸説あったが、山本利達新潮日本古典集成本（以下、『集成』と称す）が、「人づてでなく話すようになって」・「同じ事なら」と訳して以後の諸注に引き継がれている。ほとんどこれでよいようだが、源氏物語の「けぢかくて」の例を見ると、これはまず物理的な身近さを基盤とする語句であって、「心理的には隔てなく親しい情態」（木船重昭『紫式部集の解釈と論考』、以下『解釈と論考』と称す）となるのはその結果とみるべきと思われ、また次のような例もあるので、双方が「人づてでなく話すようになって」と明確に断定するのも正確ではない。

「（中将は浮舟に）いとこと多く恨みて、「御声も聞きはべらじ。たゞ、け近くて、聞こえむ事を、聞きにくしともいかにとも思しことわれ」と、よろづに言ひわびて、

（源氏物語・手習）

つまり、83番歌は、それまでの文通から進んで式部と直対してことばを交わすようになり、相手に対するお互いの気持が直に理解できるようになってきたことを受けて、宣孝が結婚を一段と迫ったものなのだと考えられる。

これに対し、紫式部は84番歌で、自分の方は宣孝に既に距離を置かぬ対応を心がけてきたうちに、確かに宣孝の言うように宣孝の薄い愛情が理解されてしまった、と反発しているのだが、この反発の真意はどのように解したらよいのだろうか。このような点については、諸注に言及をほとんど見ないが、その中では、南波浩『紫式部集全評釈』（以下、『全評釈』と称す）が、「薄き心をまづ知られぬる」は、詰問でも反撥でもなく、恋の贈答歌における常套的な表現で、式部の「心ばへ」（趣向）を示しているとともに、宣孝の式部への愛情が薄いことがわかったので、「『だからもっと、深い心を示してほしい』という甘えの表明ともなっている」といわれているのがよいと思われる。もっとも氏は、こう理解される前提として、式部の歌にある「隔てじとならひし」の表現から、彼女が宣孝にかなりの好意を持っていたことが知られることを説かれるのだが、それにも関わらず、式部が返歌を「夏衣」の語で組立てたことが、氏のいう「甘え」をもたらしているのである。

「夏衣」という語は次の歌のように、早くから「うすし（薄）」「ひとへ（偏・一重）」「なる（馴）」と結びつくのだが、

蟬の羽のひとへにうすき夏衣なればよりなむ物にやはあらぬ　（古今集・雑体・躬恒）

相手の「うすき心」を嘆く歌ばかりでなく、それと同時に、

夏衣うすきながらぞ頼まるるひとへなるしも身に近ければ　（古今六帖・二・夏衣）

夏衣うすき袂を頼むかな祈る心のかくれなければ　（為頼集）

身に近き名を頼むとも夏衣きのふ着かへてきたらましかば　（実方集）

と、薄いながらに、また肌身に近いことを頼りにしたりもするものなのである。次の元真集の贈答も、男女が通じ合う前のものだが、女は男を拒否するというより、身を許した後の男の愛情に対する不安を訴えているものである。

卯月のついたちに、いまだよそなるをむなに

今日よりはきてもすぎても夏衣見るよりうすき心とやみむ

かへし

かけてだにいふこそうけれ夏衣あるよりまさむうすさと思へば　（元真集）

このように、紫式部は、宣孝歌の「けぢかくて」「心は

見え」「隔てぬ」などの言葉から、折しも夏の季節であったゆえ「夏衣」を想起してこの語で返歌を組み立て、これまでの交際でお互いの気持は理解できたから結婚をしようという宣孝に対して、男の愛情への不安を伝え、「男心の瀬踏み」（『全評釈』）をしているのである。紫式部が宣孝との結婚にそれなりに前向きであるのは疑いない。

このように、紫式部は、越前に下向する以前から求婚が始まっていた宣孝との文通・交際を経て、次第に宣孝との結婚を具体的に考えるようになっていた。しかし、宣孝は、周知のごとく、紫式部より二十歳ほども年長で、既に何人もの女と結婚して紫式部と同年代の子も持ち、しかも、式部への求婚と同時期に近江守の娘にも懸想しているという、初婚の相手としては考慮すべき点の多い男であった。であるにも拘わらず、紫式部が、藤原宣孝との結婚を受け入れるようになった事情を考えてみると、先にも言及したように、式部と宣孝とは又従兄弟同士で、父為時と宣孝は花山朝の蔵人・具平親王の家司同士という身近さが大きな力とはなったろうが、一人の男としては、既に説かれている[3]ように、宣孝は、醍醐天皇の外戚右大臣定方の孫故権中納言藤原為輔の子で、式部との結婚が成立したとみられる長徳四年夏以降ごろは右衛門権佐（長徳四年八月兼大和守）、天元五年ころから日記も書き止め、四十歳代になっても賀茂祭などの舞人を務めるという、家格・官僚としての有能さや華やかさなどを持ちあわせており、任官も思うようにいかぬ父為時の娘で晩婚というべき紫式部の結婚相手としては、まず申し分のない男だったとみられることが大きく作用していたと思われる。推測するしかないが、枕草子あはれなるもの段の金峯山寺詣でや、紫式部集31番歌にみえる朱による血涙擬装の手紙などから知られる性格の豪放さも、紫式部はおそらく気に入っていたのだろう。

また、二人の間には、紫式部の手紙を宣孝がおそらく他の女にみせるという次のような騒動もあった。

文散らしけりと聞きて、「ありし文ども取り集めておこせずは、返りごと書かじ」と、言葉にてのみいひやりければ、皆おこすとて、いみじく怨じたりければ、

睦月十日ばかりのことなりけり

32閉ぢたりし上の薄氷解けながらさは絶えねとや山の下水

すかされて、いと暗うなりたるに、おこせたる

33こち風に解くるばかりを底見ゆる石間の水は絶えば絶えなむ

「今はものも聞えじ」と腹立ちたれば、笑ひて、返し

34言ひ絶えばさこそは絶えめなにかそのみはらの池をつ

つみしもせむ
夜中ばかりに、また
35たけからぬ人かずなみはわきかへりみはらの池に立て
どかひなし

この一連の贈答歌は、32番歌の「薄氷解けながら」が結婚した仲であることを暗示するとして、結婚後のものとする説が多いが、安藤重和氏は、次の歌を示してこの表現が必ずしも結婚を意味しないとされ、

はじめて女のもとに春立つ日つかはしける
藤原能通朝臣
年経つる山下水のうすごほりけふ春風にうちもとけな
ん
（後拾遺集・恋一）

また、この贈答では文通関係の用語に終始し、宣孝が文通中止の圧力をかけていることから、この事件はまだ文通のみで「通い」が成立していない段階のものであったのだろうといわれた（『経緯』[4]）。その後、伊藤博氏も「式部の強気な姿勢や、隠れた交情を示す歌語「山の下水」など、結婚前であることを窺わせる」（新日本古典文学大系本注、以下『新大系』と称す）とされている。妥当な見解とすべきである。

そもそも、それまでの交わした手紙を全て集めて相手に返すという行為は、二人の交際が閉じられることと繋がっていた。[5]

右のおほいまうちぎみすまずなりにければ、かの昔おこせたりけるふみどもをとり集めて返すとて、よみておくりける　典侍藤原よるかの朝臣
頼めこしことの葉いまはかへしてむわが身ふるればおきどころなし
（古今集・恋四）

（元良親王が、女宮と結婚したので）さきざきかよはせ給ひける御文とても、今は返し奉れ給ふとて、
（京極）御息所
やればをしやらねば人に見えぬべしなくなくもなほ返すまされり
（元良親王集）

言ひわたりし女のとみにきしげもなかりしかば、文返し得てんと言ひつかはして
いひそめしことの葉いかがなりにけむ吹き返さなん秋の山風
（兼澄集）

（「つつむことありてえあはぬ女」に）ふみばかりを通はせば、かひもなし、その文とり集めて返せ、と申したれば、返すとて
かづらきの神のあつむるいとなれやもの思はじとなりにけるかな
（為信集）

これらからすると、紫式部が「ありし文ども取り集めておこせずは、返りごと書かじと、言葉にてのみいひや」っ

たり、宣孝が「皆おこすとて、いみじく怨じたり」した背景には、二人のこれまでの交際の破局も可能態として見通されていたのである。この事件が、二人の結婚後のことならば、見通される破局で世間的に傷つくのは紫式部の方である。手紙を夫が散らしたなどというのは、妻の側からの離婚の理由にはならなかったであろうから。伊藤氏のいわれるように結婚前であってこそ、式部は宣孝に強い態度に出ることができる。だから、求婚し続けてきてその成就が目前になりながら、この一件によってその努力も水の泡となりかねない事態に陥った宣孝は、「夜中ばかりに」なってでも「みはらの池に立てどかひなし」と折れて関係修復を志さねばならなくなったのだと思われる。

安藤氏は、この事件の起こった年を、詞書や歌にみえる、薄氷が「こち風に解くる」「睦月十日ばかりのことなり」という点から、立春が正月十日ごろにあたった年を調べられ、正月九日に立春となった長徳二年とされた（『経緯』）。紫式部が越前に下ったとみられる年である。これによれば、おそらく前年に筑前守の任を終えて帰京したと見られる宣孝は、間なく紫式部に求婚し始め、翌年正月には紫式部と結婚後の事件と見間違うほどにうち解けた文散らし騒動を起したことになる。紫式部はこの年の夏ごろ越前に下向し、一・二回の冬を過ごして長徳三年秋冬か同四年春頃帰京し、以後長保元年（九九九）にかけて宣孝と結婚したとみられるから、そうした結婚までの長い期間を考えると、この宣孝との痴話喧嘩めいた騒動は、長徳二年の春とするにはやや早い印象がある。騒動は35番の宣孝が式部に頭を下げて折れた歌で終わっており、それに関する式部の対応は示されていないが、34番の詞書「笑ひて、返し」からも窺えるように、式部は余裕をもって駄々子のような宣孝をあしらっており、折れてきた彼を受け入れたと思われる。ここまで二人の理解が深まりながら、その後式部が結婚を先送りして越前に下るのは、彼女の年令を考えてもよほどの事情を想定しない限り考えにくいと思われる。この騒動の歌群の後に、紫式部集で、宣孝との結婚後の三月三日ごろ、桃と桜の花をとりあげて夫婦愛のあり方に関わるとみられる贈答歌（36・37番歌、後掲）が位置しているのをみても、この文散らし騒動は、結婚間近の年の春のことかと思われる。こうした視点からもう一度立春が正月十日ごろにあたった年を調べると、安藤氏は長徳四年の立春の日までしか示されていないが、長徳五年（正月十三日、長保に改元）も正月十二日が立春で（『日本暦日総覧具注暦篇古代後期2』による）、条件に適うように思う。この日の方が先に示した諸状況ともよく合う。この騒動を長徳五年（長保元年）正月のこととすれば、83・84番の贈答歌の交わされた

時期は前年の夏とほぼ限定されてくる。

こうして、紫式部は、交際時代に宣孝に関して多少の不安や不満を経験しながらも結婚した。それは、完全無欠の夫としてではもちろんなく、宣孝を総体的には自分の夫として受け入れられる男性であると、式部が納得して結婚したということを意味するであろう。では、宣孝のどのような点を認めて夫として受け入れたのかというと、それはもう当人の心内のこととして不明としか言いようがないが、既に二十歳を何歳か過ぎて当時の通常の婚期を逸していた式部としては、先にも述べたように血縁・環境的身近さ、家格・身分関係の適当性、風貌・性格の華やかさ・磊落さなどに惹かれたのだろうが、中流貴族の家の娘で、側聞する結婚制度の荒波の中に不可避的に身を投じなければならない立場の女であるならば、長期にわたる引いては突き返す一筋縄にはいかない自分とのかけひきに耐えて式部に付き随ってきた、二十歳ほどの年長で、女性関係の経験豊富な男に、妻の一人として後れて参入することに、ある種の気楽さを感じたのではないだろうか。現在と将来に対する女としての責任の身軽さというようなものを。若い情熱に突き動かされての一途な結婚とは、なかなかに思いがたい。[6]

二

紫式部と宣孝には、結婚当日から三日目頃までの歌は、伝わっていない。蜻蛉日記に載る道綱母と兼家の場合（結婚当日と三日目）のような、また

元輔がむこになりて、あしたに　　藤原実方朝臣

時のまも心はそらになるものをいかですぐしし昔なるらむ　　（拾遺集・恋四）

のような例もあるから、彼らがそれを歌わなかったとは考えにくい。だが、何らかの事情で現家集には伝わっていない。また、新婚期間の歌と思われるものもほとんどないが、唯一、以下の贈答がそれに当る可能性が指摘されている。

桜を瓶に挿して見るに、取りもあへず散りければ、桃の花を見やりて

36折りて見ば近まさりせよ桃の花思ひぐまなき桜惜しまじ

返し、人

37ももといふ名もあるものを時のまに散る桜にも思ひおとさじ

この贈答には、桃を式部に、桜を他の宣孝の妻に喩えて、式部への愛を望み、応えたものとの解釈があるが、それについては、「折りて見ば」と仮定条件になっていて比喩なら結婚前になるはず（『全評釈』）、「居りて見ば」の懸け詞

で夫の来訪を促している（『解釈と論考』）、「散る桜にも思ひおとさじ」が、桃に喩えられる式部を見下すことになる（重松信弘『紫式部と源氏物語』）、などの表現の不審から、寓意を読みとらず、桜と桃に対する態度如何を媒介とした二人の心の交流を顕示したものとする見方もあるし、それらを踏まえたうえで、やはり桃のように「近まさり」でありたいという式部の願望を確認する説もある（鈴木日出男・小町谷照彦・秋山虔他「紫式部集全歌評釈」『国文学』、昭和五十七年十月。以下『全歌評釈』と称す）。37番歌の詞書に「人」のない古本系本文の存在からも、必ずしも宣孝との贈答とも断定できないが、彼との贈答であるならば、二人にも「春爛漫に包みこまれた夫婦団欒の一齣」（『全歌評釈』）があったことが知られる。

この贈答歌を除けば、結婚後の歌とみられるもののほとんどは、なかなか来ぬ夫を待ちわびたり、恨んだりしているものばかりである。[7] 92番から95番の歌群（陽明文庫本では83番から86番）と、108番から113番の歌群（陽明文庫本では103番から108番）である。

92番から95番の歌群は、次のようである。

なにのをりにか、人の返りごとに

92入る方はさやかなりける月影をうはの空にも待ちし宵かな

返し

93さしてゆく山の端もみなかき曇り心もそらに消えし月影

また同じすぢ、九月月明き夜

94おほかたの秋のあはれを思ひやれ月に心はあくがれぬとも

六月ばかり、撫子の花を見て

95垣ほ荒れさびしさまさる床夏に露置き添はむ秋までは見じ

92番歌の「入る方」は夫の夜の訪問先である他の妻をさす。式部より下等の愛人などであったら穏やかに「うはの空にも待ちし」とはいかないだろう。月を歌材にした歌で、夫と他の女との関係を詠んだ歌は、他に蜻蛉日記の次の歌ぐらいしかまだ見いだせていないが、

寝待の月の、山のは出づるほどに、出でむとするけしきあり。さらでもありぬべき夜かなと思ふけしきや見えけむ、「とまりぬべきことあらば」などいへど、さしもおぼえねば、

いかゞせん山の端にだにとゞまらで心も空に出でむ月をば

かへし、

ひさかたの空に心の出づといへばかげはそこにも

とまるべきかな
とて、とゞまりにけり。
（蜻蛉日記上巻・天徳元年八月）

ここでは、道綱母は、夜の更けてきた頃、他の女のもとに行こうとして道綱母にその意向伺いをしてきた兼家に、皮肉を交えて兼家自身の判断を迫った「いかゞせん」の歌を詠むことで、夫の外出をやめさせることに成功した。拾遺集の、同様に本妻に他の女への外出を引き止められた景明の述懐の歌とあわせ見ても、道綱母が夫に対してかなりの強制力を行使したことがわかる。

女のもとにまかりけるを、もとのめの制し侍ければ　源景明
風をいたみ思はぬ方に泊りする海人の小舟もかくやわぶらん
（拾遺集・恋五）

道綱母は、この他にも、町の小路の女の存在を知った後、来訪した兼家を家に入れずに帰し、翌朝、「歎きつゝ独り寝る夜のあくるまはいかに久しきものとかは知る」の歌を贈るなど、他の妻に足を向ける夫に対して激しく直接的な感情を歌にして兼家に訴えているが、こうした他の妻との競合によって起こる恨みや苦悩を夫に訴えるやり方としては、道綱母のように夫に直接的に感情を投げつける形の他にも、以下のように最終的には贈答されたりして夫に伝達された可能性を十分持ちながらも、まずは自分の現在の境遇を自ら嘆いてみせるような間接的な感情の表現方法もあった。おそらくそれが、世の妻の、あるいは嫡妻以外の妻の、夫へのあるべかしい恨み方であったように思う。

兼輔朝臣に逢ひはじめて、常にしも逢はざりけるほどに　清正が母
ふりとけぬ君が雪げの雫ゆゑ袂にとけぬ氷しにけり
（後撰集・恋二）

御殿ゐし給へりける夜、いかなることかありけむ、御方を過ぎつつ、異御方にわたらせ給ひければ
かつ見つつ影離れゆく水のおもにかく数ならぬ身をいかにせむ
（斎宮女御集）

だが、紫式部の92番歌は、このようなあるべかしい恨み方よりもさらに穏やかで受動的な姿勢をみせている。清正の母のように夫の仕業に涙させられたと訴えることもせず、斎宮女御のようにわが身の処置に困惑していると嘆くわけでもなく、ただひたすらに行く先のはっきりわかっている夫の来訪を茫然と待っていたというのだから。こうした姿勢は94番歌にも共通している。そこでは、「思ひやれ」と夫に直接訴えているものの、その対象は「おほかたの秋（飽き）のあはれ」にすぎない。紫式部個人の立場に限定されず、男に飽きられた女一般の悲哀を理解せよというの

である。そこでは式部個人の悲哀は男から飽きられた女一般の中に拡散している。宣孝にすれば、ある意味で厄介な対応のされ方だが、式部個人への責任は軽減されているのである。このように、夫に対して自分の思いを直接に訴えられず嘆けずにいる紫式部は、結婚後も何らかの枠に自分をはめ込んでいて、夫の前で弱い自分を含めた自分の全てをさらけ出せず投げ出せずにいるのかもしれない。そうであった可能性は、112番歌からもうかがえる（後述）。

こうした式部の、夫に対する訴えの穏やかさは、以後の歌には明確には見られない。この92・94番歌ではなぜそうなのかを考えると、この二首に共通する、「入る方」「月」という語で歌中に明示されている、式部に対立する他の妻の存在が手がかりになりそうだ。いわば歌の成立環境ではなく、歌自体の中に夫婦の三角関係が詠みこまれていることである。そしてその対立する女性は、「入る方はさやかなりける」・「月に心はあくがれぬとも」と、式部が「うはの空に待」ったり「飽きのあはれ」を体験させられても、それを受け入れるしか仕様のないような存在として示されている。この女、若く美しい女性なのであろうかと、既に言われてもいるが、少なくとも紫式部が、自分と比較してその存在を認めるのにやぶさかでない価値のある女なのであろう。具体的に誰が考えられるのであろう。

宣孝の妻としては尊卑分脈に、紫式部以外に藤原顯猷女・平季明女・藤原朝成女の三人が記されている。長男隆光は天延元年（九七三）生まれなので（三巻本枕草子勘物）、母顯猷女が仮に二十歳で出産したとすると、彼女は天暦八年（九五四）ごろの生まれとなる。次男頼宣は長和五年（一〇一六）当時蔵人（左経記同年四月二十七日条）であるから、角田文衛氏の仮定に従ってこの時四十歳とすると、[8] 彼は貞元二年（九七七）の生まれとなる。彼の母季明女は、顯猷女の場合と同様に仮定してみると、天徳二年（九五八）生まれとなる。朝成女の生んだ四男隆佐、五男明懐のうち、四男隆佐は寛和元年（九八五）生まれで（『公卿補任』）、朝成は天延二年（九七四）に五十八歳で薨じているから、朝成女はそのころ以前の生まれとなるが、朝成や隆佐の年令を考慮すれば、生年は顯猷女や季明女に近づく。

このように紫式部以外の、宣孝の知られる妻たちの年令を推定してみると、朝成女が場合によっては紫式部とほぼ同年齢となりうるものの、他は十歳以上年長かとみられる。夫宣孝と同年齢・年長の者がいてもおかしくはない。彼女らが、紫式部の結婚当初生存していたかは不明だが、92・94番歌に「入る方」「月」という語で比喩される他の妻としては、若く美しいという点から見るならば、これら三人は想定がむずかしいというべきだろう。嫡妻あるいは本妻

という点からならば、身分的にも朝成女など可能性があろうが、不明である。「入る方はさやかなり」・「月に心はあくが」るなどから推量される美しい女性ということにこだわるならば、29番歌の詞書「近江守の女懸想すと聞く人」にあるような、彼女ら以外の全く別の女性が当時いたのかもしれない。

ともあれ、紫式部は92・94番歌に言及される女性の存在を無視せず、宣孝の妻として受け入れている（いわゆる人目を忍ぶ愛人ではなさそうである）。そうした複数の妻の存在を認め、その一人としての自分の優遇を過度に主張してはいないのである。「おほかたの秋（飽き）のあはれを思ひやれ」などの句からは、自分をさらけ出せずにそうした結婚制度下における、夫の妻への望ましい思いやりを乞い求めている気配が感じられる。この二首で、夫に対する訴えが穏やかで受け身的であるのは、この何らかの価値を認める女性への顧慮、それに触発された結婚制度自体へのある高次の認識に支えられているものかと思われる。

『全評釈』は、「おほかたの秋のあはれを思ひやれ」と詠い出したことに関して、「これこそは、一夫多妻の王朝社会に生きる女性たちの共有するものであり、これが王朝社会の実相であることを、自覚したことだろう」（四九八頁）というが、その自覚の得られたのはいつの時点であったかが、問題にはなるだろう。この他の妻の存在にも言及する92・94番歌の成立時について、『経緯』は、続く95番歌が、宣孝が生存中で娘賢子が既に誕生している年の六月の歌であるから、その成立年は長保二年しかないとして、その前に置かれた94番歌の九月は長保元年のものとし、92番歌もほぼ同時期の成立とする。歌群内の時間的配列を想定してのものだが、95番歌はともかくとして、他の妻の存在に言及する92～94番の三首については、それだけでは成立の時期を断定しがたいだろう。が、内容をみても、これらの歌は夫に対する訴えが穏やかで、式部には他の妻も視野に入れて歌の詠める余裕がみられたし、その心的余裕は、歌に用いられていることばが「うはの空」を始め、当時の歌によく見られるものばかりであることからも認められそうであるから、これらの歌の成立を、95番歌の前年長保元年の秋、宣孝と結婚して一年も経たないような時分とするのは十分可能であろう。夫に自分をさらけ出せずにいるようなところが感じられるのも、結婚後まだそう時間がたっていないもののように見える。思えばこのように、他の妻の存在を認め、受動的にしか自己を示せないような式部の態度は、彼女の性格とも相俟って、二十歳ほど年長の男の後発の妻となった時点で、採用されざるをえない側面もあったのかもしれない。事前に耳にしていたものの、実際に

体験する結婚生活は、夫の毎夜の来訪が気になる心労ばかりの日々で、日を置いて訪れて来る夫を前にしては、結婚前の予想に反して素直にうちとけられずにいる自分を発見してしまう。父親のような年令の豪快な男だから結婚すればもっと甘えられると思っていたのに、そうしようとすると他の妻の思うところが気になってしまい、他の妻と張り合うまでして自分を押し出すにはそれほど自分は女として魅力があるわけでもないし、などと思っていたのかもしれない。このように、結婚後しばらくは、紫式部は宣孝との関係で、自分の位置を見出せずにいたのだろう。

95番歌も、「垣ほ荒れさびしさまさる」は当時の和歌になかなか類例をみない表現で、そこに長保二年六月ころの宣孝の間遠さと式部の感慨とが窺えるが、とこ夏の盛りでもある秋を見通しながら、

露むすぶ風は吹くともとこ夏の花の盛りに見ゆる秋かな　（元真集）

秋風は吹きぬと音に聞きにしを盛りに見ゆるとこ夏の花　（重之集）

独り寝に露の涙する床をイメージして、

独りのみぬるとこ夏の露けきはなみだにさへや色は添ふらん　（伊勢集）

あだしのの草もねながらあるものを常夏にのみ露の置くらん　（斎宮女御集）

常夏におきふす露はなになれやあつれてせこが間遠なるらん　（和泉式部集）

そのような「秋（飽き）までは見じ」と自己の感慨を表白しているものである。この「見じ」を「体験しないだろう（生きていないだろう）」などと推量に訳す注釈と、「見（体験し）たくない」と希望に訳す注釈とがあるが、「見じ」は当然ながら打消しの意志と推量、不適当の意味を持つ。希望ではない。

今よりはうゑてだに見じ花すすきほにいづる秋はわびしかりけり　（古今集・秋上）

すみなれぬ宿をば見じと祈りしを我には神もかひなかりけり　（うつほ物語・藤原の君）

かけてだにわが身のうへと思ひきやこむ年春の花を見じとは　（後撰集・哀傷）

くづれよる妹背の山の中なればさらに吉野の河とだに見じ　（枕草子・里にまかでたるに、）

花の木はまがき近くはうゑて見じうつろふ色に人ならひけり　（拾遺集・雑賀）

したがって、打消しの推量の可能性もあるが、詞書の「六月ばかり、撫子の花を見て」に娘賢子の存在を読み、そして源氏物語におけるこの歌の影響歌を視野に入れる限り、

山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露　（源氏物語・帚木）

今も見てなかなか袖を朽たすかな垣ほ荒れにし大和なでしこ　（源氏物語・葵）

娘賢子を残しての式部の死を予想する解釈は適当でない。つまり、残るは打消しの意志、「夫の夜離れが続く現在の夏の状況を悪化させて、涙まで加えるような秋（飽き）を迎えないようにしよう」、あるいは不適当「…迎えてはいけない」のいずれかである。いずれにしてもここには、現状の悪化を回避しようとする式部の強い姿勢が示されている。

結婚後間なく夫の夜離れが始まったとしても、当時の一般として、同居せず他に妻もおり仕事もある夫が、現象的にいつも一人の妻のもとに来られないのは避けられない面があり、さらに夫に浮気性、妻に女としての魅力のなさという要素が加わるならば、それは一層顕著なものとなる道理である。このような社会に生活していた紫式部にとって、夫の独占が不可能なことは、自分に絶対の自信がない限り十分予想していたはずだろう。結婚二年目程度の妻としては、そして紫式部の性格としては、日常化しつつある夫の夜離れの悪化をくいとめ、娘のためにも改善しようと考えるのは当然である。そしてその意志を、この時の紫式部は持っていた。

三

結婚後、宣孝没以前のもう一つの歌群、108番から113番の歌は、次のようである。

108うちしのび嘆きあかせばしののめのほがらかにだに夢を見ぬかな　人のおこせたる

109しののめの空霧わたりいつしかと秋の気色に世はなりにけり　七月ついたちごろ、あけぼのなりけり。返し

110おほかたに思へばゆゆし天の河今日の逢瀬はうらやまれけり　七日

111天の河逢瀬はよその雲ゐにて絶えぬ契りし世々にあせずは　返し

112なをざりのたよりに問はむ人ごとにうちとけてしも見えじとぞ思ふ　かどの前より渡るとて、「うちとけたらんを見む」とあるに、書き付けて返しやる

月見る朝、いかに言ひたるにか

113 横目をも夢と言ひしは誰なれや秋の月にもいかでかは見し

109番歌の「しののめの空霧わたり」は、108番歌の「うちしのび嘆きあかせば」に対応させ、「七月ついたちごろ、あけぼの」に逢えずに夜を明かして嘆く息、嘆きが霧になったという和歌的発想を用いて、早くも夫婦仲は「秋（飽き）」の様子になったというもの。「飽き」とはどのような状態を指すかというと、和歌では人に忘れられ、かかわりの絶えることをいうが、

怨みていまは物いはじといふ人に
秋とてや今はかきりの立ちぬらん思ひにあへぬ物ならなくに
（伊勢集）

人に忘られたりと聞く女のもとにつかはしける
よみ人しらず
世の中はいかにやいかに風の音を聞くにも今は物やかなしき

返し
伊勢
世の中はいさともいさや風の音は秋に秋添ふ心地こそすれ
（後撰集・雑四）

人恋しきに
をしまれぬ涙にかけてとまらなん心もゆかぬ秋はゆくとも
（和泉式部集）

御心かれがれにならせ給へりし比、嵯峨野に花見になんゆくとのたまはせたりしに、娘に代わりて
忘れゆく心の秋のつらければ我こそ嵯峨の花をだに見む
（赤染衛門集）

結婚した夫婦の場合、結婚後どのくらいの期間で「秋」が来るかというと、参考になるのは蜻蛉日記の次の例である。

絶えぬと見ましかば、仮に来るにはまさりなまし、など、思ひ続くる折に、ものしたる日あり。物もいはねば、さうざうしげなるに、前なる人、ありし下葉のこと（一月ほど前の作者の独詠「我が宿の嘆きの下葉色深くうつろひにけりながめふるまに」のこと）を、物のついでに、いひ出でたれば、聞きて、かくいふ。

折りならで色づきにけるもみぢばは時にあひてぞ色まさりける

とあれば、硯引き寄せて、

あきにあふ色こそましてわびしけれ下葉をだにも嘆きしものを

とぞ書き付くる。（蜻蛉日記・上巻・天暦十年七月）

前栽の花、色々に咲き乱れたるを、見やりて、臥しながら、かくぞいはるゝ。かたみに恨むるさまのことどもあるべし。

もゝくさに乱れて見ゆる花の色はたゞ白露のおく

にやあるらむ

と、うちいひたれば、かくいふ。

みのあきを思ひ乱るゝ花の上のつゆの心はいへば
さらなり　（蜻蛉日記・上巻・天徳元年八月）

蜻蛉日記作者の結婚は天暦八年八月ごろだから、前者の例はほぼ二年後、後者は三年後のもの。この時期、天暦九年十月末に兼家は町の小路の女と結婚し、天徳元年夏に町の小路の女が男児を出産するという具合に、町の小路の女の事件がまさに展開している最中で、兼家は道綱母や時姫のもとへ足が遠のきがちであった。つまり、結婚二・三年でも「秋」はくるのであり、紫式部の場合もまさに、「秋の景色に世はな」ったのは、先に見た95番歌との関係からしても結婚後二年ほどの時期であるとみられ、さほど不思議な展開ではない。しかし、夫婦間に「秋」が来たからといってそれが即離婚を意味するものでないことは、蜻蛉日記をみても明らかである。そのことはまた、式部歌の下句「秋の気色に世はなりにけり」の類似表現も、数は多くないが、小町集巻末他本歌や俊頼髄脳古歌など、伝承的奥行きをうかがわせるものが拾えることからも、補強できる。

ながめつつ過ぐる月日も知らぬまに秋の気色に成りにけるかな　（小町集）

（題知らず）　中宮内侍

うつろふは下葉ばかりと見しほどにやがても秋になりにけるかな　（拾遺集・恋三）

をとこのもとに迎へたるに、琴を弾かするに、女とだえたれば、をとこの心も変りたるやうに見えしかば

いかなればあはれと思ひしむつごとの深きをたゆる世となりにけん　（小馬命婦集）

ものをのみ思ひしほどにはかなくて浅茅がすゑの世となりにけり　（和泉式部集）

天の河うき木にのれる我なれやありしにもあらず世はなりにけり　（俊頼髄脳・采女）

つまり、紫式部にとって宣孝の夜離れは苦悩の種ではあったが、まさに世に遍在する夫婦間の現象であったのであり、109番歌も、足の遠のく夫からの妻へのとりなし歌に対する切り返し歌としては、そうした普遍性をもつ発想の表現をとり入れた常套的なものとまずはいえようか。

紫式部に「秋」がきた原因は、92～95番歌群中の92・94番歌、あるいはこの108～113番歌群中の113番歌からもうかがわれるように、本妻か新妻かは不明だが、宣孝の関心を惹きつける他の妻の存在であり、また112番歌の詞書「うちとけたらんを見む」からうかがわれる、宣孝からみて不足している紫式部の気兼ねなさ・気楽さであったとみられる。

今井源衛『紫式部』（人物叢書、以下『叢書』と称す）は妻としての紫式部について、「彼女は、生来素直で柔和という性格ではなかった。むしろ芯の強い、また表面に出さないまでも勝気で我執の強い人だったろう。その上に頭がすばらしくよくて、恐ろしい程の教養がある。加えて若いころの不幸な恋愛経験といちじるしく遅れた結婚、どう見ても夫として御し易く気楽な妻ではあり得なかった」という。留保すべき点があるとしても、組みやすい妻でなかったのは確かだろう。このような式部の様子は、112番歌の下句からもうかがわれる。打解けを望む宣孝の意向に素直に添おうとするのではなく、贈答歌的な切り返しの姿勢を見せるのである。この姿勢は、上句の「問はむ」に「訪はむ」、「一言」に「人言・人毎」をかけて、本旨以外に、いい加減なきっかけで訪れて来る人毎にうちとけて逢おうとは思いません、と複数の男との対応を匂わす余裕までみせている。

だが、このような宣孝への姿勢は、二人の中に「秋」がきている状況でのものならば、表面的な歌のことばだけの世界で遊んだお体裁とも思えない。こう詠んだ歌の裏側で、式部は現状の膠着に自分自身不満をもちつつ、夫から指摘されたように実際に夫に素直になれずにいるのだと思われる。と同時にその一方で、苦境にはまりながら夫に強い態度に出る力も持っている。このような点からすると、「秋の気色に世はなりにけり」の下句を持つ109番歌を含むこの108～113番歌群における紫式部自身の状況は、「露置き添はむ秋までは見じ」と詠んだ95番歌を含む92～95番歌群で他の妻の存在を受け入れつつ穏やかに宣孝と対応していた時のそれとは、異なるようだ。

113番歌も、「よこめ」「ゆめ」「秋の月にも」などの語句の解釈と関連して上句・下句の構成が理解しがたく、「難解のため諸説紛々」（『全歌評釈』）の状態だが、おそらく、めでるべき月の出ていた翌朝、昨夜の不来訪を言い訳してきた夫の不実をなじった歌で、宣孝が、昨夜お前もきっと見ているだろうと美しい月を見ながらおまえの事を夜明けまでずっと思っていたなどと言ってきたのに対し、式部が、夜はずっとお前以外に決して目を向けないなどと誓っていたのはどなたでしたかしら、皆がめでるという秋の月であってもどうして目が向けられたのかしら、などと皮肉をいったのだろう。とすれば、112番歌と同様の姿勢である。

『経緯』は、詞書にある「月見る」を八月十五日のこととして、この歌は、当日に雨の降った長保二年における詠歌ではなく、前年長保元年のものとするが、「月見る」風流は、当時の貴族の日常において八月十五日に限らず「有明」その他、その折々に応じて行われるのだから、長保二

年秋の詠歌でないと決めつける必然はないだろう。ちなみに「よこめ」は、竹内美千代『紫式部集評釈』が採るように、「夜籠め」をかけるのだろう。当時は、「夜を籠む」の方が散見されるが、

このもとに今宵は寝なむ桜花またよこめても散りもこそすれ　（躬恒集）

夜をこめて鶏のそらねははかるともよに逢坂の関は許さじ　（枕草子・頭の弁の、職に参り給ひて）

名詞の例も、後には拾える。

明け渡るもと山とほくせこたてて夜こめの鹿の行くかたぞなき　（新撰六帖・二・かり）

それで、「よこ目（夜こめ）」・「夢」・「月」・「見る」が関わりを持つのである。

110・111番歌の贈答は、式部と宣孝のいずれからの贈答であるかという点で説が別れている。ほとんどは宣孝の贈歌、式部の答歌としているが、『全歌評釈』と『経緯』は逆に式部の贈歌、宣孝の答歌としている。前者は特に理由をあげていないが、後者『経緯』は、「平安朝の既婚女性にとって最大の恐怖の一つは夫の『夜離れ』であったと言ってよいが、『夜離れ』を恐れる女性とは即ち『逢瀬』を重視する女性である。式部も」七月ついたちごろの109番歌で夜離れの原因「飽き」を歎じており、その数日後のこの贈答でも「逢瀬」を重視する110番が式部歌なのだとする。確かにそうなのだが、ここでさらに確認しておかないといけないのは、「おほかたに思へばゆゆし」き七夕における女性の「逢瀬」に対する態度であろう。いま、七月七日に、既に関わりをもっている男の来訪のない女が、どのような歌を詠んでいるかをみてみると、多くが、忌むべくゆゆしき夜でありながら、逢えないよりは逢えるほうがよい、年に一度の織女でさえ逢えているのに、というものである。少なくとも逢瀬を軽視するものはない。そして女からの贈歌も多い。贈答歌の片割れをなす男の歌は、日のゆゆしさを逢えない理由とするものが目立つ。

来ること難かりける人に、七月七日に言ひやりける

忌むべくはしのぶものからよもすがらあまの河にぞうらやまれける　（伊勢集）

人の来むとて、来ねば

契りけむ人をすぐさぬ七夕はわがごとかくも思はざらなん

返し

七夕の契りけむ日はすぐすともたとふべしやはことゆゆしく

また

ゆゆしとも思はざりけり七夕の忘れぬ仲のあらまほしさに　（中務集）

また七月七日に

けふとだに契らぬ仲はあふさかを雲井にとのみききわたるかな

返し

あふことをけふとなかけそかささぎのはしきくだにもゆゆしきものを　（馬内侍集）

七月七日、待つ人のもとに

その程と契らぬ仲は昨日までけふをゆゆしと思ひけるかな　（和泉式部続集）

七月七日、こむといひたる人に

七夕に貸して今宵のいとまあらば立ち寄りこかしあまの河波　（和泉式部続集）

近き所に〈我ガ男ノ〉かたらふ人ありときき て、

いひやる

あまのがは同じわたりにありながら今日も雲ゐのよそにきくかな

又同じ事、〈我ガ男ノ〉かたらふ女どもが許に

織女におとるばかりの仲なれば恋ひわたらじなかささぎの橋

八日、男の、女の許にやるとてよませし

忌むとてぞきのふはかけずなりにしを今日彦星の心地こそすれ　（和泉式部続集）

女は七夕であっても、あるいは七夕だからこそ逢いたいのである。風雅集秋歌上が110番歌を紫式部歌として採っているのも（初句「おほかたを」）、そうした七夕における女歌のあり方に基づいているのだろう。『全歌評釈』のいうように、「これに対して男の返歌は、七夕の星合いなど自分たちとは無関係、二世を契る仲が浅せないのならそれでよいではないかという巧みなはぐらかし」といえよう。111番歌が、夫宣孝の歌であるというのは、この歌に基づいていると見られる源氏物語幻巻の「たなばたのあふせは雲のよそに見て別れの庭に露ぞおきそふ」が男である光源氏によって詠まれていることも消極的な理由となろう。

こうして、108～113番歌群の紫式部の歌は、「秋の気色に世はなりにけり」という認識、「絶えぬ契りし世々にあせずは」という夫の逃げの姿勢、七夕や秋月観賞など夫婦交流の節目となる夜にも式部のところには夫が来ないなど、92～95番歌群の歌に較べて、夫婦を取り囲む状況の一層の困難さの進展が窺われ、結婚から二年近くを経過した宣孝との生活における最後の秋、長保二年秋頃のものかと考えられるが、一方式部には宣孝に皮肉を言ったり反撥をしたりなどの精神的力もあった。一般的な夫婦関係の破綻に行き

着くにはいまだ幾分かの余裕が残されている段階のようだ。[9]

四

宣孝は、長保三年四月二十五日に卒するが、それに触れた歌が40～43番歌群と、48番歌である。

去年より薄鈍なる人に、女院隠れさせ給へる春、いたう霞みたる夕暮れに、人のさし置かせたる

40雲の上ももの思ふ春は墨染めにかすむ空さへあはれなるかな

返し

41なにかこのほどなき袖を濡らすらむ霞の衣なべて着る世に

亡くなりし人の娘の、親の手書きつけたりけるものを見て、言ひたりし

42夕霧にみ島隠れし鴛鴦の子の後を見る見るまどはるるかな

同じ人、荒れたる宿の桜のおもしろきこととて、折りておこせたるに、

43散る花を嘆きし人はこのもとの淋しきことやかねて知りけむ

「思ひ絶えせぬ」と亡き人の言ひけることを思ひ出でたるなり

世のはかなきことを嘆くころ、陸奥に名ある所々かいたるを見て、しほがま

48見し人の煙となりし夕べよりなぞむつましき塩釜の浦

40番歌にみえる「女院」藤原詮子の崩御は、長保三年閏十二月二十二日であり、「隠れさせ給へる春」は正確には古本系の陽明文庫本のように「又の（春）」と入っている方がよい。「去年より」も陽明文庫本では「去年の夏より」とありより正確である。母女院の喪に服す帝のいる宮中との関わりをうかがわせる贈歌に対して、式部の返歌は、「ほどなき袖」と卑下しているが、既に言われているように、「これは挨拶の、儀礼の歌で」、「式部には他人を顧慮しないで、ひたすら夫を悼む純粋の哀傷歌というものは」（清水好子『紫式部』、以下『新書』と称す）厳密にはない。42番歌は宣孝の他の妻を母とする娘の歌、43番歌もその娘から贈ってきた桜とともにあったはずの贈歌に対する返歌、48番歌は、44番歌からの絵に関わる歌群の一つで、一般的な「世のはかなきことを嘆くころ」塩釜の名所絵を見て詠んだ歌であり、これらは、夫の死を悼む心構えではじめから一途にその思いを詠んだものではない。このことは、伊勢が敦慶親王の死を悼んだ歌をはじめとして、

式部卿宮うせさせたまひて四十九日はてて、人々家々ちりまかりいづるに

かなしさぞまさりにまさる人のみにいかにおほかるなみだなりけり

君によりはかなきしにや我はせんこひかくすべき命ならねば　（伊勢集）

よく知られている和泉式部続集の帥の宮挽歌群や、赤染衛門が大江匡衡の死を悼んで詠んだ二十数首の挽歌群の存在と比較するとき、やや奇異に映る。それほどの激情を紫式部は示さないのである。40～43番歌群の直前には、おそらく紫式部が越前へおもむいた頃、同じく西海へ下向した女友達の死を悼む歌が置かれている。

遠きところへゆきにし人の亡くなりにけるを、親はらからなど帰りきて、悲しきこと言ひたるに

39いづ方の雲路ときかばたづねましつら離れけん雁がゆくへを

この歌は、41・43番歌と同じく、故人の親兄弟との交流の場における、他人を顧慮した歌であるが、ここで式部が故人の行方を尋ねようと詠んで、故人の存在が式部において持っていた意味を直接表明しているのと較べても、宣孝の死に関わる歌群が、故人に対する紫式部の一般的感情、悲しみ・悼み・追憶などの存在は知らせても、式部の生における故人の個別的意味を想起させない点が目立つ。式部は夫の死を胸の奥底で独りかみしめ見つめているのだともいえるが、それにつけては気になる表現がある。41番歌の「なにかこのほどなき袖を濡らすらむ」であり、48番歌の「なぞむつましき塩釜の浦」である。前者には「なにか…濡らすらむ」という、後者にも「なぞむつましき…」という疑問表現があるのである。

前者の疑問表現「なにかこのほどなき袖を濡らすらむ」は、下句「霞の衣なべて着る世に」という、贈歌にいう諒闇を受けて、国中が国母を悼んで喪服を着ているときに、私はなぜ低い身分の個人的なことにとらわれて涙しているのでしょう、と卑下しつつ我が身を責めてみせるのだが、この責めの疑問には、夫の死に涙するよう自分を駆り立てているものの存在を見極めようとする紫式部の醒めた意識がある。なぜ自分は夫の死をいま悲しんでいるのか。宣孝の求婚の時の思い出から、あるいはそれ以前の両家の交渉の歴史の中における宣孝の姿から、結婚に至るまでの二人の心の揺れ動きや、結婚へ抱いた彼女なりの期待と結婚の喜びの記憶、娘の懐妊・出産の時期と前後して顕著になってきた夫の不実と自分の心の変移、式部の苦悩が明確な結果をもたらさないうちに突然この世から去っていった夫の存在のあっけなさへと、式部の想いはとどまることなくめぐり始めた。紫式部には、三年にも満たない宣孝との結婚生活の時間を軸に、現在の自分を在らしめているそれまで

の自己の年月の実質が、本性が問われ出したのだろう。

後者の「なぞむつましき…」でも、式部は、夫の遺骸が火葬の煙となって空に昇っていった夕べから、どうして塩釜の浦が身近に思われるのか、と陸奥の名所絵をみながら自分に問うている。諸注「なぞむつましき」を「名ぞむつましき」とするのがほとんど全てである。確かに詞書に「名あるところ〳〵」とあり、南波浩『紫式部集の研究校異篇・伝本研究篇』によれば、「なぞ」が「名ぞ」と表記されている本も多くある。しかし定家本の最善本とされる実践女子大本ではこの部分、同前書の凡例によれば「なそ」とあるよしであり、古本系の善本とされる陽明文庫本（笠間影印叢刊による）も同じく「奈」の字母による「な」文字で「なそ」とある。この部分、「名ぞ」でなく「なそ」で解釈する理由は表記の面から十分あるのである。また、「名ぞ」の語句であると判断されるこの時代の他歌をみると、次のように「な」が「名」であるべき語句上の明確な限定のあるのが普通であるが、43番歌にはそれがない。

人しれずたえなましかばわびつつもなき名ぞとだにいはましものを　（古今集・恋五）

色にいでて恋すてふ名ぞ立ちぬべき涙にそむる袖のなければ　（後撰集・恋一）

花にのみ心をかけておのづから人はあだなる名ぞたちぬべき　（和泉式部集）

なかなかにわが名ぞをしきそま川のすくなきくれの下し文かな　（赤染衛門集）

さらに、「名」と「むつまし」の関わる歌をみると、次のように文字どおり「をみな（女）へし」、「撫でし子」「床なつ」、「諸鬘」など、名の音の意味に関係するものなのであるが、

秋の野にやどりはすべしをみなへし名をむつまじみたびならなくに　（古今集・秋上）

なでしこの名にむつましき床なつを夜しも見ぬぞわびしかりける　（賀茂保憲女集）

もろかづら落ち葉をなにに拾ひけむ名はむつまじきかざしなれども　（源氏物語・若菜下）

「塩釜の浦（しほがまのうら）」の名の音の持つ意味自体には、43番歌の中で響きあうものがない。「煙」は、「塩釜の浦」の関連語ではあるが、名の音の示す意味自体とは関わらないのである。

このように48番歌の「なぞ」を「名ぞ」と解釈するには問題がある。この部分、実践女子大本など数本を除く定家本の諸本と別本系諸本に、「名ぞ」でなく「名も」とあるのも、「名ぞ」の形であることによって生ずる不審の解消

と関わっているかと思われる。

この「名ぞ」に対し、「なぞ」の方は、次の例のように、「どうして…は…なのか」というぐらいの意味になる。

あだなりと名にぞ立ちぬるをみなへしなぞ秋の野におひそめにけむ　（亭子院女郎花合）

思はずは思はずとやはいひはてぬなぞ世の中の玉だすきなる　（古今六帖・五）

なぞ人のかれはつれなき下紐の解けばゆはむといひてしものを　（古今六帖・五）

しらかはに晒す布にもあらなくになぞわが恋の心地かなしき　（古今六帖・五）

春の田をなぞうち返し悲しきは頼り少なき我が身なりけり　（公任集）

48番歌も、「夫が火葬され煙となった夕べ以来、どうして身近に感じられるのか、塩釜の浦よ」というような意味である。このように塩釜の浦が身近に感じられる理由は、当時、塩釜の浦、あるいは塩釜が煙との関わりで詠まれるものだったからである。

河原の左の大臣の身まかりて後かの家にまかりてありけるに、塩釜といふ所のさまをつくれりけるを見てよめる　〈つらゆき〉

君まさで煙たえにし塩釜の浦さびしくも見え渡るかな　（古今集・哀傷）

塩釜の浦とはなしに君こふるけぶりたえずもなりにけるかな　（古今六帖・三）

ほかざまになびくをみれば塩釜の煙やいとどもえ渡るらん　（本院侍従集）

いにしへの心もたえずゆく水にやく塩釜の煙をぞみる　（中務集〈書陵部蔵本〉）

式部が目にした塩釜の絵にも海士の焼く塩釜から煙が立ち昇っていたのであろう。夫の火葬の煙と塩釜からの煙とが似通うことで、式部にとって陸奥の塩釜が「むつまし」いものになっているのであるが、その理由、双方の煙の似通いを式部は「なぞ」と問いにしたのである。というのは、塩釜の煙は比喩としては引用歌のようにこの世の人に対する恋が基本で、死者に対しては用いないからである。右の古今集哀傷歌も、一義的には塩焼く煙の絶えたことをいっている。つまり、式部は塩釜の煙を媒介にして、亡くなった宣孝を恋い慕っていることを表白しているのである。そのような自分の心情を見つめ問い直したのが、「なぞむつましき塩釜の浦」の句であると思われる。[10]

41・48番両歌にみえる疑問のように、紫式部は宣孝の死を悲しみ、恋い慕いながらも、同時にそのような自分を対象化して、現在の境遇に立ち至っている今の自分を見つめ、

これまでの自己の経緯を反芻していたのだと思われる。そこにある式部の醒めた意識が、他の女流歌人が夫や愛人を失って歌いあげた慟哭とは異なる静謐な情調をもたらしたのである。42番歌が、宣孝の他の妻を母とする継娘の詠であるのに、それに対する式部の返歌が現存の紫式部集ではとどめられておらず、継娘の詠自体を独立した「その人自身の歌として」(『新書』)、紫式部集の中に収められているのも、紫式部における宣孝の死の意味を客体化する姿勢の表れであり、43番歌で逆に、宣孝邸から贈られてきた桜に添えられていたはずの継娘の歌が示されず、返歌にあたる式部の歌だけを示して、そこで、拾遺集の、子を思う心を桜に託した中務歌を踏まえつつ、

子にまかりおくれて侍りけるころ、東山にこもりて　中務

咲けば散る咲かねば恋し山桜思ひ絶えせぬ花のうへかな　(拾遺集・春)

生前の宣孝の父としての姿を追憶しているのも、宣孝を紫式部との個別的拘束から開放して、一個の人間として客体視しようとする姿勢の表れであろう。

こうして、宣孝の死に関わる紫式部の歌には、宣孝と自己の存在と境遇を客体視して、その意味を問うていく姿勢が顕著である。

五

このように、紫式部は、夫宣孝の突然の死によって、決して早いとはいえぬ年令で開始した結婚生活を、十分な展開も、その行き着く先も見極められぬうちに閉じなければならなくなった。その後、家集によれば、式部に再婚を迫る求婚者も現れたが、式部は宣孝との結婚以前の娘時代の歌にもみられたような厳しい態度でそれをつき返している。

門叩きわづらひて帰りにける人の、つとめて

49世とともに荒き風吹く西の海も磯辺に波は寄せずとや見し

と恨みたりける返りごと

50かへりては思ひ知りぬや岩かどに浮きて寄りける岸のあだ波

年返りて、「門はあきぬや」と言ひたるに

51誰が里の春のたよりに鶯の霞に閉づる宿を訪ふらむ

次も同じ背景の贈答であろう。

たまさかに返りごとしたりける人、後に又も書かざりけるに、男

90をりをりにかくとは見えてささがにのいかに思へば絶ゆるなるらむ

返し、九月つごもりになりにけり

91霜枯れの浅茅にまがふささがにのいかなるをりにかく
と見ゆらむ

このような男への強い対応からは、式部が結婚生活を経ることで、自己の生きる意欲に決定的な打撃を受けていなかったことが知られる。式部の人間的エネルギーはいまだどろどろとした情念として式部の内部に燃え残っていたのだと思われる。宣孝の死後いい寄ってきた男たちと再婚に至らなかった事情は、相手と式部のいずれの側によるものか、もう明らかでない。が、こうしたいまだ燃えつづける式部の生命的情念が、宣孝の死後、夫と自己の境遇を客体視していく中で、不完全燃焼におわった宣孝との結婚生活の意味を問い直させ、自己のこれまでの人生の砕片を溶解して、あれほどの結婚生活の苦悩を味わったにしては、空蟬や朝顔・軒端荻、夕顔や六条御息所などとの、「すきごとども」や「しのび給ひける隠ろへ事」をつぎつぎにひき起こして「言ひ消たれ給ふとが多かなる」光源氏とその周囲の女性たちを創造していくことに繋がったのだと思われる。もちろん、源氏物語の誕生は、これだけで説明が可能なほど単純ではないが、源氏物語の始発は、生身の紫式部の人生に基づきつつ、その置かれた既成の現実から開放されようとした、紫式部の可能態としての人生の再構築であったと思われる。その中で式部はもう一度生き直してみようとしたのだろう。その意味で、母更衣に三歳で死別して人生を歩み出す主人公光源氏は、幼い時に母に死に別れ、男性コンプレックスを抱いていたとみられる紫式部自身なのであり、満たされぬ心のまま漁色におもむく彼の姿は、紫式部と紫式部が実体験した複数の女の人生を翻弄した男宣孝本人との融解したものでもあったろう。

また一方、宣孝の死の経験は、今井源衛氏や三谷邦明氏がいわれるように[11]、紫式部の意識に人の死に対する明確な観念を形成したとみられる。母と姉・女友達の死を経て醸成されてきていたものが、ここではっきりと姿を現したのである。人は死ぬことによってその人生を完成させる。源氏物語において主要な人物の死が幾つも描かれているのはそのためとみられる。今井氏の言葉を借りれば、登場人物の「死を描くことによって、逆に、それらの人物は、はじめて生きた人物として作者に実感させられたのだ」。

この観念にみられる生と死の対立と不離、これはまた、三谷氏のいわれる「一つの同じ対象を両極的な二つの視点で捉える方法」による両義的な視点を、紫式部の内部に確立させた。宣孝死後の詠歌をみるならば、この視点は、紫式部の知的認識と内的情動の共起と対立であると言いかえてもよい。理性では認識しながらそれには従えない生命的な感覚である。

世の中の騒がしきころ、朝顔を人のもとへやるとて

52消えぬ間の身をも知る知る朝顔の露とあらそふ世を嘆くかな

世を常なしなど思ふ人の、幼き人の悩みけるに、から竹といふもの瓶に挿したる、女ばらの祈りけるを見て

53若竹の生ひゆく末を祈るかなこのよを憂しと厭ふものから

これらの歌にみられるような一首内における自己の意識と情動の対立は、当時における疫病の流行という同様の環境の中で詠まれた和泉式部や赤染衛門の歌と比較しても、紫式部歌において顕著であるから、紫式部に固有の思考パターンであったと見てよいだろう。

世の騒がしきころ

はかなさにつけてぞ嘆く夢の世をみはてずなりし人によそへて

物をのみ思ひしほどにはかなくて浅茅がすゑのよとなりにけり　（和泉式部集）

世のはかなきころ、夢ばかり人にあひて

あるほどにとひ見てしかな絶えにしはいかばかり憂き世とかありしと　（和泉式部集）

世のいみじうはかなきころ

聞こえしも聞えず見しも見えぬよにあはれいつまであらんとすらん　（和泉式部集）

世の中いと騒がしきころ、問はぬ人に

世の中はいかになりゆくものとてか心のどかに音づれもせぬ　（和泉式部続集）

露より世のはかなき事をあるに

草のうへの露とたとへぬときだにもこは頼まれじ幻の世か　（和泉式部続集）

世の中騒がしうなりて、人のかたはしより亡くなるころ、人に

しらじかし花の葉ごとにおく露のいづれともなき中に消えなば　（和泉式部続集）

つねよりも世の中はかなう見えしころ、九月九日聞きと聞く人は亡くなる世の中に今日も我が身はすぎんとやする　（和泉式部続集）

桜の花を折らせて、定基僧都の母

夢にだに見えずなりなんのちよりはこれやかたみにならんとすらん

返し、人のいとおほく亡くなりにし頃にて

みるままにいとどもののみ悲しけれ散りゆく花に世をたとへつつ　（赤染衛門集）

いみじう世のはかなきころ、久しく音せぬ人に
消えもあへずはかなき比の露ばかりありやなしやと人
の問へかし　（赤染衛門集）

このような紫式部に固有の思考パターンと見てよい自己の意識と情動の共起と対立は、先に見た宣孝の死を見つめる歌に顕著だったところの自己を対象ごと客体視していく視点と軌を一にするものといえるが、このような視点を持てたことが、宣孝の死による衝撃を理性の面で解体・緩和し、式部の生命的情念を保全することにも繋がり、結局は、和泉式部や赤染衛門と異なって、紫式部を散文文芸である源氏物語の作者に育て上げていったものであったと思われる。このような視点を最終的に形成する契機となった宣孝との結婚と夫の死は、紫式部の人生にとって確かに重大な体験と画期であった。そのことは恐らく、源氏物語を執筆する行為の中に、自己の生命の再生を企て、その果てに、浮舟の再生にまで行き着いてしまった地平に立ちすくむ紫式部にしてみても、やはり変らぬ重さを保っていたのではないか。源氏物語を生きることになった第二の人生の混沌とした母胎の提供者として、そしてまた、女としての紫式部に、遅い夏の日を瞬時に吹き抜けた疾風のように、さまざまの思い出を残して消えていった最初の男として、宣孝は依然、紫式部の心の中に生きていたろう。

注

(1) 紫式部集の引用に際しては、まま漢字をあてる。また、以後に行う、和歌集諸作品の引用も同様にして新編国歌大観による。さらに、蜻蛉日記・枕草子・源氏物語の引用は角川文庫に、うつほ物語は室城秀之『うつほ物語』による。

(2) 鬼束隆昭「朝顔と夕顔―宣孝関係の紫式部歌と源氏物語―」『日本文学』昭和四十八年十月、に詳しい。

(3) 藤原宣孝の男性としての評価に関しては、清水好子『紫式部』、米山千代子『紫式部とその夫』、沢田正子『紫式部』（人と思想174）、など、女性の側の見解に肯定的なものが目立つ。

(4) 安藤重和「紫式部と宣孝の交渉経緯をめぐって―紫式部集試論―」『後藤重郎教授定年退官記念　国語国文学論集』昭和五十九年。『経緯』と称す。以下、同じ。

(5) 馬内侍集に見える次の例は、一見よく似ているが、「かき集めて送らせたる」と詞書にあるのは、それまで交換した相手の手紙ではなく、「返す」という言葉を使うのではなく、五首の連作を「送らせ」ている点、また、相手からの「返し」（返歌）が記されている点から、文通が出来なかった間に相手に送るべくしたためていたこちら側の複数の文または歌であるようだ。

つつむことありてふみなども通はぬほど、かき集めて送らせたる

ゐせきする岩間の水のうち忍びしのびかねてぞねはなかれける

いかなればしらぬにおふるうきぬなはくるしや心人しれずのみ
うき草に枕やすらむをし鳥のよるはのどけきいやはねらるる
我が恋にくらべてしかな雨ふれば庭のうたかた数をかぞへて
寝覚にはききもしつらんよもすがら雨のこゑにはおとりやはする

返し

五月雨に夜ひとよ雨はしのふれどそれよりほかのこゑはせざりき

(6) 越前からの帰京とその帰路における80～82番歌の明るさに、宣孝との結婚予定を読みとるのは、以上のような結婚までの屈折を考えると早計であろうし、帰京自体には、武生滞在中の25～27番歌に窺える深い雪に象徴される心理的封殺からの激しい脱出願望、都恋しさの力を見ておかないといけないだろう。

(7) 次の歌は、宣孝に関する歌か、だとしても結婚前か結婚後か、詞書からは、状況がわかりにくい。

久しくおとづれぬ人を思ひ出でたるをり

78忘るるは憂き世の常と思ふにも身をやる方のなきぞわびぬる

(空白)

返し

79誰が里も訪ひもや来るとほととぎす心のかぎり待ちぞわびにし

この二首は、内容的に贈答歌とは考えられず、また二首の間に78番歌の答歌と79番歌の贈歌とその詞書がそれぞれ脱落しているとみられるので、これらが、どのような状況での歌かは不明である。79番歌は、宣孝の贈歌に対する答歌とすると、『解釈と論考』のいうように、「誰が里も訪ひもや来ると」の句は、特定の男性の来訪を期待して詠んだとするには皮肉な内容で、「心のかぎり待ちぞわびにし」の切実さと齟齬するため、「待たされた恨みをこめて揶揄的に応酬したものであって、宣孝との楽しき日々の記念の一つとい」(『全歌評釈』)うこともできる。他の妻の存在を認めてかなり弱気で穏やかな歌とも詠めるので、92・94番歌との時期的・内容的関連をみることもできる。

なお、この78・79番歌の後には、80～85番歌にかけて越前からの帰京の歌と結婚前の宣孝との贈答歌とみられる歌が続いているが、その後86～89番歌までは宮仕え後の歌となり、逆に前には56～77番歌まで同じく宮仕え後の歌群が続き、78・79番歌直前の74～77番歌は道長との贈答が置かれているので、78・79番歌は間の四行空白分も含めて道長との関係歌であった可能性もあるだろう。

紫式部と道長との関係は近年では、角田文衛「道長と紫式部」『紫式部の世界』、池田和臣・宋貴英「紫式部の恋」(『中央大学文学部紀要』170、平成十年三月)などに強く主張されているが、二人の関係は十分ありえることで、この78・79番歌の中の句「忘るるは憂き世の常と思ふにも」・「誰が里も訪ひもや来るとほととぎす」などは、宮仕え後の式部の認識、道長の振る舞いとしてみても齟齬がないのではないかと思われる。

(8) 角田文衛「紫式部の結婚」『紫式部の世界』

(9) 古本系陽明文庫本では、実践女子大本113番歌（陽明文庫本108番歌）の後に、実践女子大本では、前後の宮仕え中の歌群の間に「又、いかなりしにか」の詞書で置かれている119番歌（陽明文庫本109番歌、詞書なし）「なにばかり心尽くしにながめねど見しにくれぬる秋の月影」が位置する。それによれば、作者自身はさほど自覚していないのだが、夫の不来訪につい涙したとよめる。

(10) 48番歌とよく似た歌が、源氏物語夕顔巻と和泉式部集にある。

見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな
（源氏物語・夕顔）

はかなくて煙となりし人により雲居の雲のむつまじきかな
（和泉式部集「観身岸額離根草、論命江頭不繋舟」歌群）

源氏物語夕顔巻歌が、48番歌より後の成立であるのはほぼ確かであろう。和泉式部集歌も、長保四年（一〇〇二）六月の為尊親王薨去後、あるいは寛弘四年（一〇〇七）十月の敦道親王薨去後の作ならば、48番歌に後れる可能性が強い。48番歌の新しさがうかがわれる。

(11) 今井源衛「源氏物語執筆の動機」『解釈と観賞』昭和三十六年十月、三谷邦明「源氏物語の創作契機」『物語文学の方法Ⅱ』。